
 学 会 記 事

平成 30 年度新潟精神医学会

日 時 平成 30 年 10 月 13 日 (土)
午後 2 時 30 分～午後 6 時
会 場 新潟グランドホテル

I. 一 般 演 題

1 高齢発症の嫉妬妄想にドネペジルが奏功した 1 例

恩田 啓伍¹⁾²⁾・折目 直樹¹⁾
横山 裕一¹⁾・染矢 俊幸¹⁾

新潟大学医歯学総合病院精神科¹⁾
魚沼基幹病院精神科²⁾

【はじめに】高齢者の妄想は、Alzheimer 型認知症や Lewy 小体型認知症など認知症圏で出現することが多い。嫉妬妄想の有症率は全精神疾患中の 1% 以下とまれであるが、認知症群においては有症率が高い。高齢者の妄想の治療については一定の見解はまだないが、今回われわれは高齢発症の妄想に対してドネペジルが奏功した 1 例を経験したので報告する。

【症例】85 歳、男性、真面目で几帳面な性格であった。習慣飲酒の量が多く、40 代の頃は 1 日に日本酒を 8 合程度摂取していた。50 代以降は節酒し、焼酎 2 杯程度を続けていた。糖尿病や慢性腎不全、脂質異常症の既往があり、72 歳時と 79 歳時に慢性硬膜下血腫の治療歴があった。X-6 年 (79 歳) 頃から認知機能が緩徐進行性に低下し、対人交流が減少した。その頃からヘリコプターを見て「警察に追跡されている」などと被害妄想が出現した。A 病院で MRI や MRA を施行されたが異常は指摘されなかった。X 年 3 月には「夜に妻の部屋に若い男性が来て不貞行為を行っている」などの嫉妬妄想が出現した。X 年 6 月に精査目的に B 病院精神科を初診し、特定不能の統合

失調症スペクトラム障害の診断でアリピプラゾール 3mg を開始された。同 12mg に増量されたが、眠気のため自己中断し、その後はリスペリドン 1mg に変更された。しかし、症状の改善がないため、X 年 8 月に B 病院精神科に医療保護入院した。入院時点では、会話の迂遠さがあり、HDS-R 27 点、MMSE 25 点、COGNISTAT にて見当識、注意で重度障害、構成、記憶で軽度障害域といった結果が認められた。入院後も妄想は持続していたが、リスペリドンをドネペジル 5mg に変更されたところ、次第に妄想は訂正可能なほどに軽減し、X 年 10 月に退院した。また、その時点では HDS-R、MMSE、COGNISTAT いずれでも著明な改善を認めていた。

【考察】認知症患者における妄想の有症率は高く、認知症の種類と妄想のタイプには一定の傾向がある。従って、妄想を理解することは認知症の治療選択を考える上での一助となり得る。認知症に伴う妄想に対する薬物療法としてはコリンエステラーゼ阻害薬 (ChEI) のエビデンスが高く、ChEI による前頭葉や辺縁系の血流改善効果が期待されている。また、非定型抗精神病薬 (AAP) の使用は副作用の観点から慎重になるべきであり、本例の実行機能低下は AAP による副作用だった可能性も考えられた。

2 パーキンソン病を併発した統合失調症の 1 例

湯川 尊行¹⁾・寺島 健史²⁾・井上 絵美子¹⁾
有波 浩¹⁾³⁾・恩田 啓伍¹⁾

魚沼基幹病院精神科¹⁾
新潟大学医歯学総合病院
魚沼地域医療教育センター神経内科²⁾
新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野³⁾

【はじめに】パーキンソン病は 50～60 歳代に多く発症し、脳や末梢自律神経系の神経細胞が変性する神経変性疾患である。動作緩慢、振戦、筋強剛、姿勢保持障害などの運動症状と、嗅覚障害、自律神経症状、精神症状、認知機能障害、睡眠障害等の様々な非運動症状がみられる。統合失調症

と特発性パーキンソン病の合併例は多く存在すると想定されているが、実際の報告数は少ない。薬剤性パーキンソン症候群と特発性パーキンソン病によるパーキンソン症状の鑑別が困難であることがその理由の一つとして挙げられる。今回我々は、薬剤性パーキンソン症候群の薬剤調整のため入院となり、精査の結果、統合失調症に特発性パーキンソン病を併発したと診断された一例を経験した。本発表は本人および夫の同意を得ている。

【症例】60歳代、女性。X-31年、幻聴、被害関係妄想が顕著となりA病院精神科で統合失調症と診断された。X-18年からは、リスペリドン最大12mg、ピペリデン最大6mg主体の薬物療法で精神症状は概ね安定していた。X-3年からはB病院精神科に転医した。X年1月、ピペリデンを5mgから4mgに減量したところ、流涎、呂律不良、手指振戦、上肢の筋強剛、動作緩慢、小刻み歩行等の錐体外路症状が悪化した。薬剤調整目的に3月6日B病院精神科に任意入院となった。頭部MRI検査、脳血流シンチグラフィで、特異的な所見に乏しく、ドパミントランスポーターシンチグラフィで線条体の集積低下、MIBG心筋シンチで心筋への集積低下を認め、神経内科で診察の結果、特発性パーキンソン病を併発していると診断された。リスペリドンをクエチアピン600mgに置換し、パーキンソン症状は著明に改善し、精神病症状の大きな悪化もなく退院となった。

【考察】統合失調症の治療の経過中に錐体外路症状が顕著となる際には、薬剤性パーキンソン症候群のみならず、特発性パーキンソン病の併発を考慮し診療にあたるのが求められる。臨床症状だけでは、統合失調症に特発性パーキンソン病を併発しているのか判断することは難しく、ドパミントランスポーターシンチグラフィやMIBG心筋シンチグラフィ等のSPECT画像が有用であると考えられた。

3 統合失調症罹患同胞2人とはどこ婚両親の全エクソームシーケンス

森川 亮・井桁 裕文・渡部雄一郎

保谷 智史・染矢 俊幸

新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野

【はじめに】統合失調症の発症には遺伝が深く関わっている。遺伝の要因として、頻度は高いが発症に与える効果量が小さいリスク多型と、頻度は低いが発症への効果量が大きいリスク変異がある。統合失調症の発症に大きな効果を持つ稀なりリスク変異を同定するため、我々はどこ婚の両親を持つ罹患同胞2人を有する家系の全エクソームシーケンスを行った。

【方法】統合失調症罹患同胞2人とはどこ婚の両親を対象に全エクソームシーケンスを施行した。なお、非罹患同胞3人からはゲノムDNAサンプルの提供を受けられていない。検出された変異を以下の条件でフィルタリングし、候補リスク変異を選択した。すなわち、常染色体上に存在する、シーケンス深度が10以上、効果が高度または中等度、潜性遺伝形式で両親から伝達、アレル頻度が1%未満である。候補リスク変異の機能は、PolyPhen-2、PROVEAN、CADDにより予測した。

【結果】全エクソームシーケンスにより、213,038個の変異を検出した。フィルタリングの結果、候補リスク変異としてSPATA7遺伝子に複合ヘテロ接合体変異(Asp134Gly変異とIle332Thr変異)を同定した。Asp134Gly変異は母から、Ile332Thr変異は父から罹患同胞2人に伝達されていた。Asp134Gly変異はデータベースに未登録、Ile332Thr変異はアレル頻度が0.00045であった。機能については、双方とも有害であるとは予測されなかった。

【考察】全エクソームシーケンスによって、統合失調症罹患同胞2人に同定されたSPATA7遺伝子の複合ヘテロ接合体変異(Asp134Gly変異とIle332Thr変異)は、統合失調症の発症に関与している可能性がある。ただし、非罹患同胞3人からはサンプルの提供を受けられていないため、